

三軒屋遺跡発掘調査概要・I

—府営かんがい排水事業櫻井川地区に伴う発掘調査—



1998. 3

大阪府教育委員会

はしがき

三軒屋遺跡は、大阪府の南部、和泉山脈に源を発する櫻井川東岸に展開する繩文～室町時代の集落跡であります。

泉佐野パイプライン敷設事業は、関西国際空港の関連地域整備事業の一つとして、大阪府農林水産部によって計画、実施されてきました。これは、農道などに用水管（パイプライン）を埋設し、農業用水を常時確保し、地域の農業振興に資するものであります。

さて、泉佐野パイプライン敷設事業に伴う発掘調査は今年度で5年目を迎えるました。今回、報告する三軒屋遺跡の発掘調査は、府営かんがい排水事業櫻井川地区に伴うものであります。パイプライン敷設事業に伴う発掘調査という性格上、調査区は幅約1.6m、延長約300mと狭長なものであり、また現道を開削して調査を実施するため、一度に調査区を設定できないという困難さがつきまといました。しかし、こういった悪条件にもかかわらず、良好に副葬品が遺存する古墳時代後期の石室を検出し、また奈良時代や鎌倉時代の大溝などが検出されました。このような小規模な調査の積み重ねが三軒屋遺跡の性格を徐々に明確にするものと考えられます。そして、本地域の歴史にとどまらず、日本の古代～中世史を解明していく上でかけがえのない重要な資料になるものと確信できます。

本調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに、深く感謝の意を表します。今後とも本府文化財保護行政に対して一層の御理解、御協力を賜わりますようお願い申し上げます。

平成10年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野一美

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会文化財保護課が、大阪府農林水産部より依頼を受けて平成9年度に実施した泉佐野市長滝所在、三軒屋遺跡の府営かんがい排水事業櫛井川地区に伴う発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師 上林史郎を担当者として実施し、平成9年11月1日に着手し、平成10年3月31日に終了した。
3. 調査の実施にあたっては、大阪府泉州農と緑の総合事務所、泉佐野市、泉佐野市教育委員会の他、地元関係者の方々から多大な協力と援助を受けた。記して感謝の意を表したい。
4. 本書で使用した標高は、すべてT.P.（東京湾標準潮位）表示値である。
5. 本書の執筆については上林があたった。また、編集その他については、技師 地村邦夫の助力があった。

目 次

はしがき

例 言

本 文 目 次

第1章 調査にいたる経過.....	1
第2章 三軒屋遺跡をめぐる環境.....	3
第3章 調査の成果.....	3
第1節 調査の方法.....	3
第2節 基本層序.....	3
第3節 検出された遺構と遺物.....	7
第4章 まとめ.....	15

挿 図 目 次

- fig. 1 泉佐野市三軒屋遺跡の位置
- fig. 2 調査地点位置図 (S=1/2,500)
- fig. 3 遺跡分布図 (S=1/25,000) 國土地理院複製図による
- fig. 4 調査区全体図 (S=1/1,000)
- fig. 5 基本土層図 (水平方向S=1/400, 垂直方向S=1/40)
- fig. 6 長滝7号墳検出位置図 (S=1/100)
- fig. 7 長滝7号墳石室実測図 (S=1/10)
- fig. 8 長滝7号墳石室遺物出土状況図 (S=1/15, 土器は約1/8)
- fig. 9 長滝7号墳石室出土土器 (S=1/3)
- fig. 10 三軒屋遺跡出土土器 (S=1/3)
- fig. 11 長滝古墳群分布図 (S=1/5,000)

図 版 目 次

P L A T E 三軒屋遺跡周辺斜め写真 (上が北西)

- | | |
|------------|-------------------------------|
| P L. 1 遺構① | No. 4 付近全景 (南西から) |
| | No. 2 + 20m付近 溝、ピット (南西から) |
| | No. 3 付近 落ち込み、溝 (南西から) |
| P L. 2 遺構② | No. 5 + 15m付近 落ち込み、ピット (南西から) |
| | No. 5 + 10m付近 落ち込み (南から) |

P L. 3	遺構③	No. 5 +25m付近 落ち込み（南西から） No. 2 +25m付近 溝4断面（北から） No. 2 +25m付近 溝4（南西から） No. 2 +30m付近 ピット群（北から）
P L. 4	遺構④	No. 1 +20m付近 落ち込み1断面（東から） No. 1 +10m付近 落ち込み1断面（東から） No. 0 +10m付近 落ち込み1南肩断面（東から）
P L. 5	長滝7号墳①	石室全景（東から） 石室全景（北から） 石室全景（真上から）
P L. 6	長滝7号墳②	石室細部（真上から） 石室細部（南から） 石室細部（北から）
P L. 7	長滝7号墳③	石室拡大（東から） 石室拡大（南から）
P L. 8	遺物①	1~14は長滝7号墳
P L. 9	遺物②	包含層他出土土器

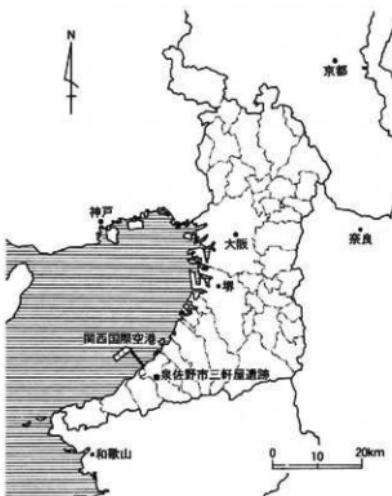


fig. 1 泉佐野市三軒屋遺跡の位置

三軒屋遺跡発掘調査概要・I

—府営かんがい排水事業梗井川地区に伴う発掘調査—

上林史郎

第1章 調査にいたる経過 (fig. 1, 2)

大阪府泉佐野市は、大阪市内から南西へ約38km、和歌山市から北東へ約24kmのところにある。

市域は、東西約5.4km、南北約13kmの南北に細長いL字状の地形を呈し、その範囲は湾岸部から和泉山脈まで含み、面積は約54.38km²をはかる。西は大阪湾に臨み、西南部は泉南市及び泉南郡田尻町、北部は貝塚市及び泉南郡熊取町、東南部は和泉山脈を介して和歌山県那賀郡粉河町や同那賀郡打田町に接している。人口は約96,000人をはかり、関西国際空港のお膝元として近年発展し、泉南地域の中核都市の一つになりつつある。地場産業としてタオル製造などがあり、全国的にもよく知られている。また、玉葱栽培を中心とした農業も盛んである。

さて、泉佐野パイプライン敷設事業は、関西国際空港の関連地域整備事業の一つとして、大阪府農林水産部によって計画、実施されているものである。これは、農道などに用水管（パイプライン）を埋設し、農業用水を常時確保し、地域の農業振興に資するという役割を担っている。

三軒屋遺跡の発掘調査は、府営かんがい排水事業梗井川地区に伴うものである。パイプライン敷設に伴う発掘調査という性格上、調査区は幅約1.6m、総延長約300mと狭長なものになった。また現道を開削しながら調査を実施するため、一度に調査区を設定できないという困難さがつきまとったが、こういった条件にもかかわらず古墳や奈良時代の大溝、土坑などが検出された。

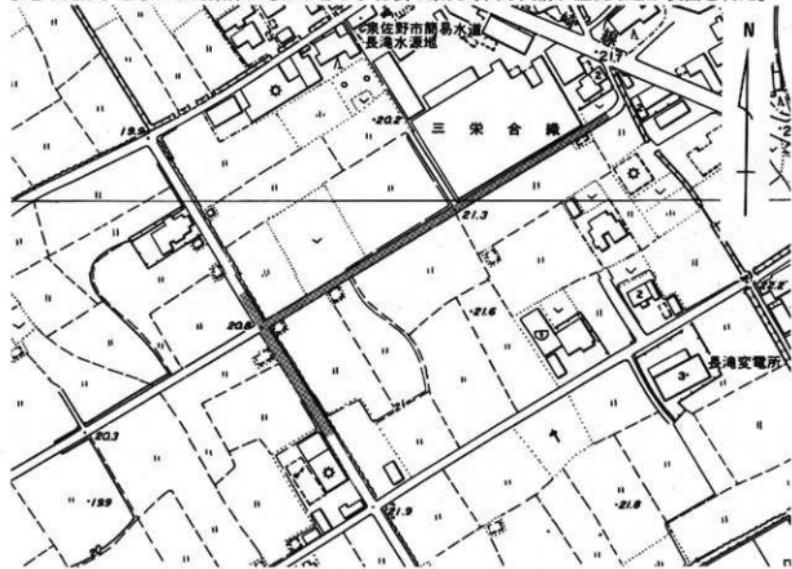


fig. 2 調査地点位置図 (S=1/2,500)



1. 三軒屋遺跡
2. 上之郷遺跡
3. 日根野遺跡
4. 山出遺跡
5. 岡口遺跡
6. 小塙遺跡
7. 中嶋遺跡
8. 白水池遺跡
9. 十二谷遺跡
10. 丁田遺跡
11. 大坪遺跡
12. 市堂遺跡
13. 北之前遺跡
14. 野ノ宮遺跡
15. 宮ノ前遺跡
16. 堀外遺跡
17. 八王寺遺跡
18. 西ノ上遺跡
19. 川原遺跡
20. 向井山遺跡
21. 笹ノ山遺跡
22. 母山遺跡
23. 梨谷遺跡
24. 熊野街道
25. 俵屋遺跡
26. 末廣遺跡
27. 安松遺跡
28. 長瀬遺跡
29. 椿田池遺跡
30. 梨之芝遺跡
31. 机场遺跡
32. 堤原遺跡
33. 南中安松遺跡
34. 岸ノ下遺跡
35. 中菖蒲遺跡
36. 岡ノ崎遺跡
37. ダイジョウ寺跡
38. 長瀬古墳群
39. 諸目遺跡
40. 禅興寺跡
41. 向井代遺跡
42. 向井池遺跡
43. 意賀美神社
44. 別所北遺跡
45. 別所遺跡
46. 穴田遺跡
47. 三軒屋遺跡
48. フキアゲ山東遺跡
49. 穴田古墳群
50. 新家古墳群
51. 岩の前遺跡
52. 中ノ川遺跡

fig. 3 遺跡分布図 (S=1/25,000) 國土地理院複製図による

第2章 三軒屋遺跡をめぐる環境 (fig. 3)

三軒屋遺跡は、櫻井川東岸に展開する泉南地域でも屈指の大複合遺跡（縄文～室町時代）である。遺跡は、JR阪和線を中心に東西約1.4km、南北1.1kmの広大な範囲に広がり、西では諸目遺跡、東では上之郷遺跡と接している。また、遺跡内部には長滝古墳群も含まれている。三軒屋遺跡の既往の調査では、縄文時代晚期の溝や作業場と考えられる遺構が検出され、多量の土器や石鏃、石皿、磨石、石棒なども出土している。弥生時代では、前期から集落が営まれており、竪穴式住居などが検出されている。また、中期の方形周溝墓も存在し、集落域と墓域の双方が同一遺跡内で検出されるという貴重な成果が提示されている。長滝古墳群では、5世紀中葉から6世紀にかけての方墳が6基検出されている。その内1号墳は、墳丘を削平されていたものの、周溝内から巫女形埴輪や須恵器大甕・器台などが出土している。また、古墳と近接して5世紀の集落があり、泉南地域では希少な韓式系土器や初期須恵器が出土している。さらに、7世紀初頭には、掘立柱建物のみ（屋4棟、倉4棟）で構成される集落が長滝2号墳に近接して検出されている。次に、幻の白鳳寺院といわれている禪興寺が、府道日根野・羽倉崎線を挟んだ北側に位置する。禪興寺は長滝の現集落とほぼ重なっているため、明確な寺院遺構は検出されていない。ただ、山田寺式や紀寺式、川原寺式の軒瓦が出土し、14世紀初頭の『和泉国日根野村絵図』にも立派な堂塔伽藍が描かれており、その存在は確実であろう。今後の地道な調査に期待したい。

第3章 調査の成果 (fig. 2～10)

第1節 調査の方法 (fig. 2, 4)

今年度の調査区は、JR阪和線長滝駅の西南部、府道日根野・羽倉崎線の南側の農道内に位置し、総延長は約300mをはかる。調査区周辺の大部分は水田や畑が広がっているが、僅かに倉庫や小規模な工場、個人住宅が農道際に立地している。なお、調査区が農道内にあるため、2～3日のうちに開削、調査、埋め戻し、仮復旧という工程を完了しなければならなかった。ゆえに、一日で完了できる範囲は幅約1.6m、長さ約10mにすぎなく、それら一日の工程を約300mの調査範囲にわたって繰り返し実施した。また、調査区の平面形は、直線ではなくL字状を呈し、かつ広範囲に及ぶため、方眼による地区割りは実施できなかった。そのかわり、パイプラインの工事用ポイントNo.1～No.7（50mピッチ）をそのまま使用して、平面図（1/50）や断面図（1/20）を作成した。

第2節 基本層序 (fig. 5)

土層の堆積については、調査区が広範囲に及ぶため明確にはしえないが、fig. 5にまとめた。細かい説明は省くが、基本的には上からアスファルト、路床、旧耕土、床土、近世に相当する黄褐色系粘質土、中世の包含層と考えられる灰褐色系粘質土があり、部分的にあるいは遺構の埋土として暗灰色粘質土や黒褐色粘質土が堆積している。なお、地表面の高さは、南側の長滝7号墳付近でT.P.+20.1m、北側のNo.6+20m付近でT.P.+20.3mをはかる。多少の凹凸はあるものの、あまり傾斜はみられない。

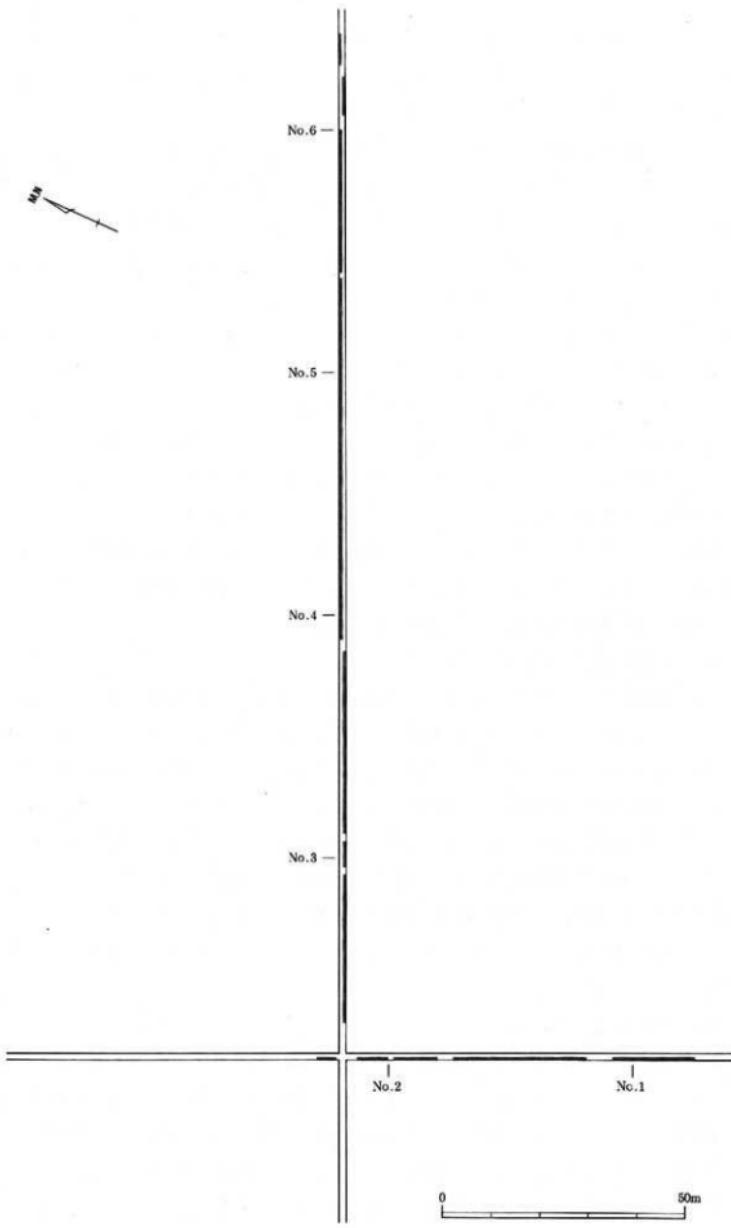


fig. 4 調査区全体図 ($S=1/1,000$)

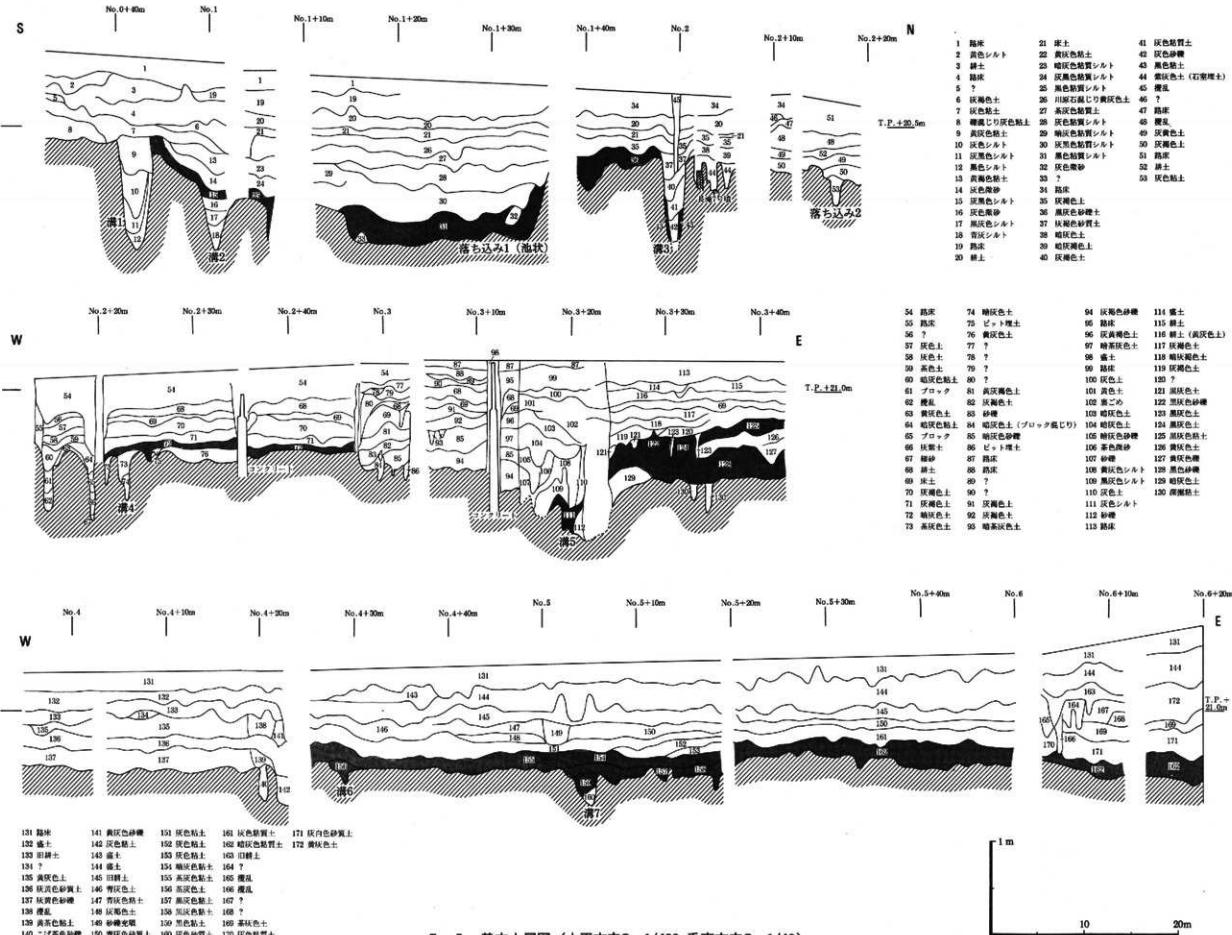


fig. 5 基本土層図 (水平方向S=1/400, 垂直方向S=1/40)

第3節 検出された遺構と遺物 (fig. 2, 4 ~ 10)

調査は、埋管設置の底面（道路面から約1.6m）及び溝などの深い遺構を除いて、地山まで掘削することができた。また一部を除いて、平面調査を実施しており、それに伴い写真撮影や断面図及び平面図を作成した。調査区内で検出された遺構には、長滝7号墳の石室、大小の溝、土坑、落ち込み、ピットなどがある。

①長滝7号墳 (fig. 4 ~ 11)

調査区の北西端、No.2付近で検出された。東側には新築まもない二階建て住宅がある。

さて、古墳の墳丘は削平され、その規模は明確ではないが、良好に遺物が遺存する玄室の東半部を検出することができた。なお、石室の西半部は現在も道路直下に保存されているものと考えられる。

検出できた墓壙の規模は、南北約2.2m、東西約1.1mをはかる。現存する石室の内法は、長さ約1.4m、幅約0.65mである。主軸はほぼ南北方向である。石室の石材は、上部が削平されており、奥壁及び東側壁の1~2段分しか遺存していない。遺存していた石材は、奥壁4石、東側壁6石であり、下段の石は内側にその辺を揃えていた。すべて櫛井川流域に分布する河原石であろう。石室の底面には敷石がなく、直接土間に木棺や副葬品を埋置したものと考えられる。また、後世の削平にもかかわらず、東側壁に沿って須恵器などの土器類がほぼ原位置で検出された。

(fig. 8) 11の杯身は破片であったが、その下部で1の杯身が正位で検出された。その南側では、蓋杯の1セット(2,3)が正位で置かれ、それに接する形で別の蓋杯の1セット(4,5)が蓋を密閉した状態で置かれていた。次に、それらの南側では杯身6が斜めになって検出され、その西側では土師器長頸壺(14)も斜めになって検出された。杯身6の南側では密閉された状態の蓋杯の1セット(2,3)が南側に転んだ状態で、また小型の提瓶(13)が口縁部を東南側に向けて検出された。さらに、東側壁に接するところで短頸壺9,10が上下に重なって検出され、9が10の蓋になるような状態であった。なお、石室内ではこれらの土器以外の遺物は検出されなかった。おそらく、西側には木棺が安置されていたものと考えられるが、鉄釘などは出土しなかった。鉄釘を使用しない木棺なのである。石室底面の高さは、T.P.+19.8mをはかる。

石室の規模については明確ではないが、長さ2m前後、幅1m前後の玄室を有する横穴式石室であろう。羨道の有無や、石室プランについてはわからない。石室の構築時期については、出土土器から6世紀後葉頃と考えられる。

長滝7号墳出土土器 (fig. 9)

石室内から出土した遺物には、須恵器蓋杯(1~8)・短頸壺(9,10)・提瓶(13)、土師器壺(14)などがあり、比較的良好に遺存している。

1の杯身は完形品である。口径12.3cm、受部径14.7cm、器高4.3cmをはかる。口縁部は外反し、端部は尖り気味。受部には沈線がみられる。体部と底部は鋭いヘラケズリによって画されている。口縁部及び体部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ、内面は仕上げナデ。ロクロ回転

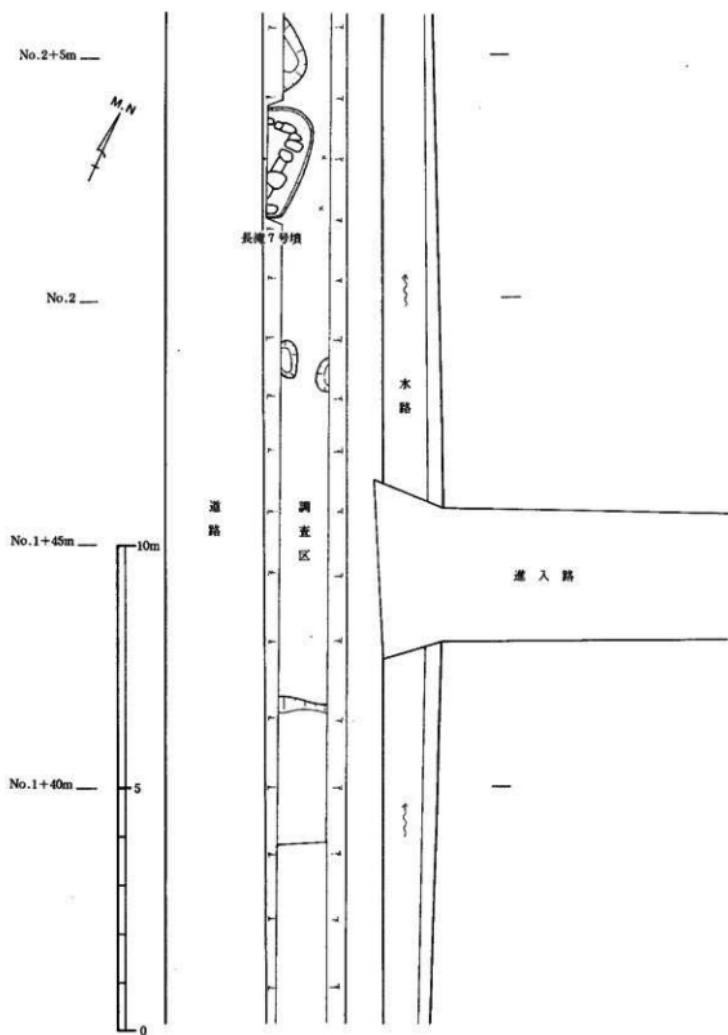


fig. 6 長滝 7号墳検出位置図 (S=1/100)

は時計回り。色調は灰白色を呈している。2は杯蓋で、口縁部一部欠損する以外完存している。口径14cm、器高4.2cmをはかる。口縁部は内湾し、端部は尖り気味。口縁部内面には一条の沈線

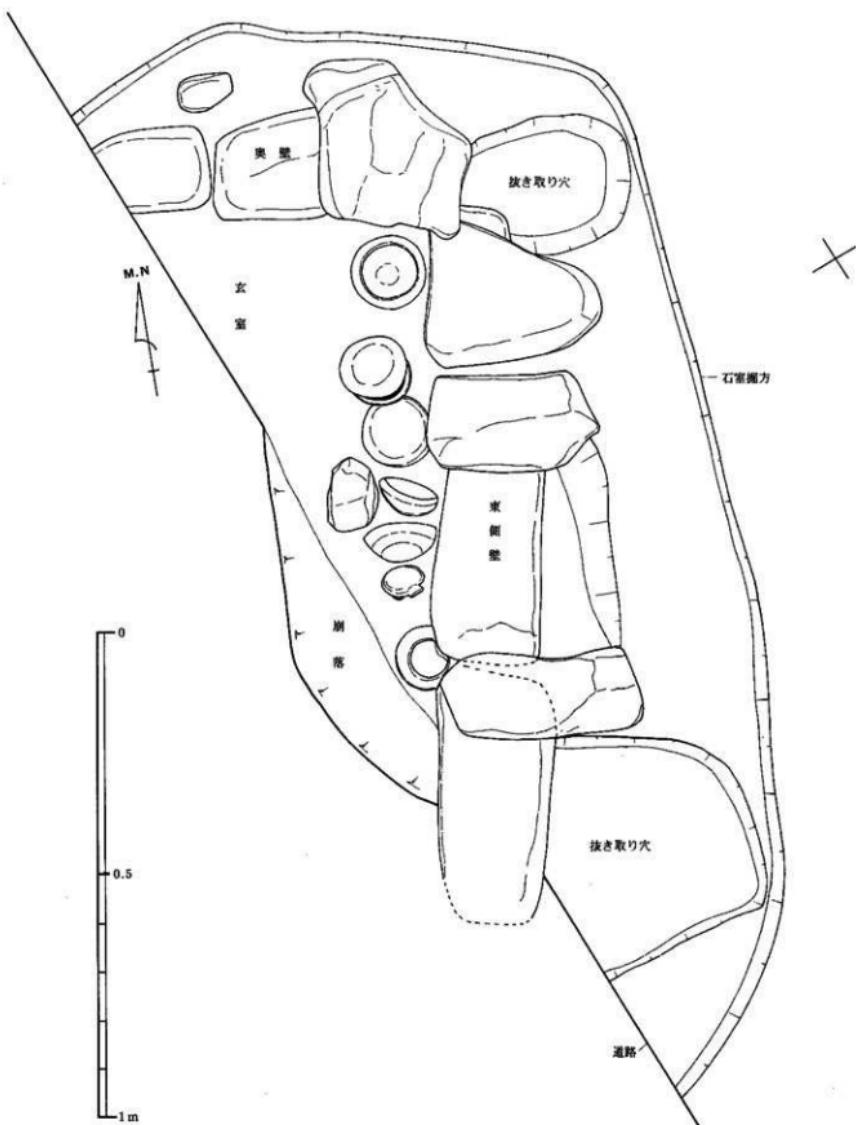


fig. 7 長滝7号墳石室実測図 (S=1/10)

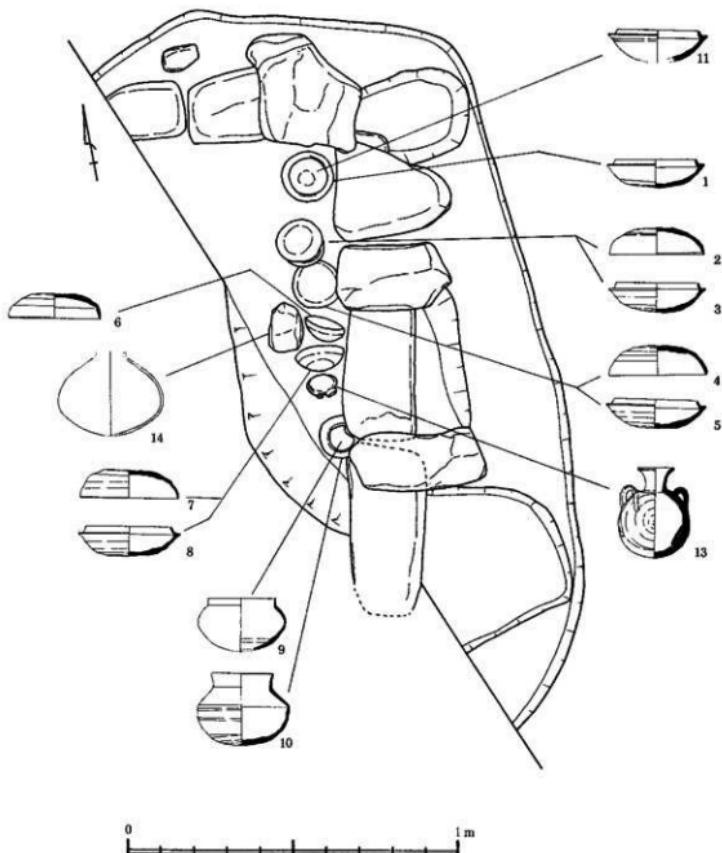


fig. 8 長滝7号墳石室遺物出土状況図 (S=1/15, 土器は約1/8)

がめぐっている。器は全体的に丸みを帯びている。口縁部及び体部内外面は回転ナデ。天井部外面は回転ヘラケズリ。ロクロ回転は時計回り。外面には重ね焼きの痕跡がみられる。3は2とセットになる杯身で完形品である。口径12.3cm、受部径14.6cm、器高4.5cmをはかる。口縁部はやや外反し、端部は尖り気味。立ち上がりは短い。受部には沈線がみられ、その外面は回転ナデによって若干凹んでいる。また、底部の器壁は分厚い。口縁部及び体部内外面は回転ナデ、底部外面は

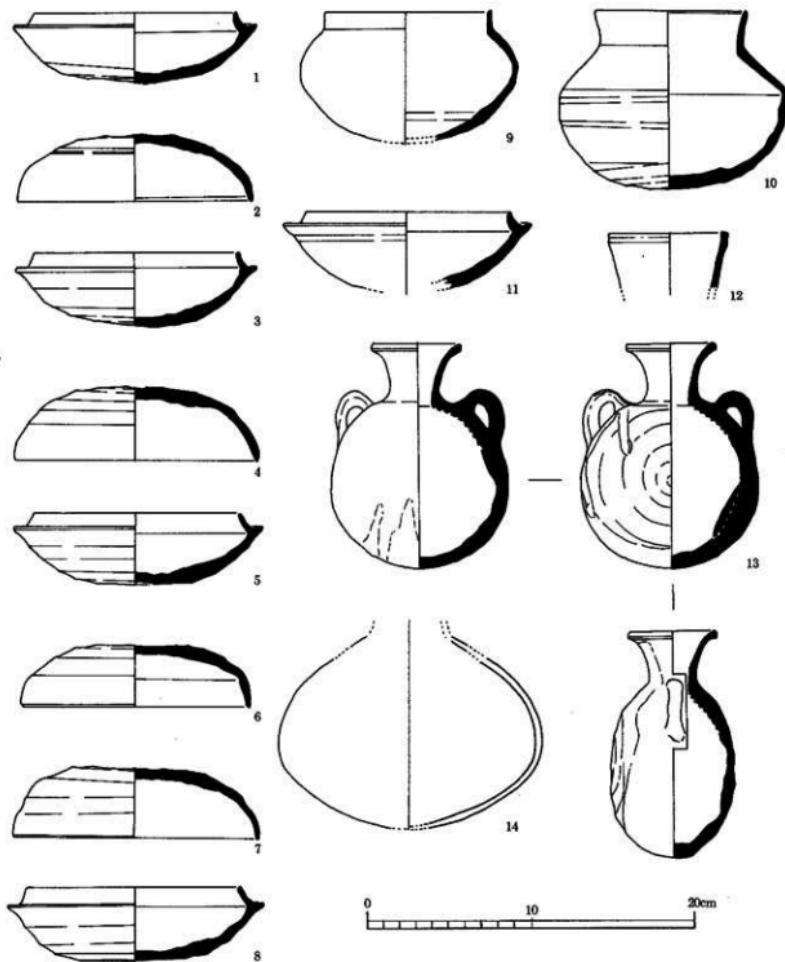


fig. 9 長達7号墳石室出土土器 (S=1/3)

鋭い回転ヘラケズリ、内面は仕上げナデ。ロクロ回転は時計回り。色調は灰白色を呈している。体部外面の一部には自然釉が付着している。4は杯蓋で完形品である。口径14.4cm、器高4.5cmをはかる。口縁部は内湾し、端部は尖り気味。器は全体的に丸みを帯びている。口縁部及び体部内外面は回転ナデ。天井部外面は回転ヘラケズリを二度施している。ロクロ回転は時計回り。外面には重ね焼きの痕跡がみられる。また、黒色粒を多く含んでいる。5は4とセットになる杯身

で完形品である。口径12.4cm、受部径15.1cm、器高4.3cmをはかる。口縁部は内傾し、端部を丸くおさめる。受部には沈線がみられ、その外面は回転ナデによって若干凹んでいる。また、底部の器壁は分厚い。底部外面にヘラを押し当てた痕跡がある。口縁部及び体部内外面は回転ナデ、底部外面は鋭い回転ヘラケズリ、内面は仕上げナデ。ロクロ回転は時計回り。色調は灰白色を呈している。体部外面には重ね焼きの痕跡がみられる。また、黒色粒を多く含んでいる。6はやや小型の杯蓋で完形品である。口径13.6cm、器高3.8cmをはかる。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめる。また、天井部の器壁は分厚い。口縁部及び体部内外面は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は仕上げナデ。ロクロ回転は時計回り。色調は淡青灰色を呈している。胎土には黒色粒を多く含んでいる。7も杯蓋の完形品である。口径14.8cm、器高4.4cmをはかる。口縁部はやや内湾し、端部を丸くおさめる。口縁部及び体部内外面は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ。ロクロ回転は時計回り。胎土には黒色粒を多く含んでいる。器外面半部には灰がかぶった痕跡がある。8は7とセットになる杯身で完形品である。口径12.9cm、受部径15.5cm、器高4.4cmをはかる。口縁部は内傾し、端部を丸くおさめる。受部には沈線がみられ、その外面は回転ナデによって若干凹んでいる。また、底部の器壁は分厚い。口縁部及び体部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ、内面は仕上げナデ。ロクロ回転は時計回り。器外面全体に灰をかぶっている。黒色粒を多く含んでいる。9はやや小型の短頸壺の破片である。復元口径10cm、同器高8.05cmをはかる。口縁部は真直ぐ立ち上がり、端部は内側に面をもつ。調整は摩滅しているため明確ではないが、口縁部及び体部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリを施しているものと思われる。黒色粒を多く含む。10も短頸壺で口縁部を欠失する以外、完存している。口径9.2cm、体部最大径13.7cm、器高10.9cmをはかる。口縁部は直立し、端部は尖り気味におさめる。肩部は鋭いヘラケズリによって稜線がめぐる。口縁部及び体部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。ロクロ回転は時計回り。胎土には黒色粒を多く含んでいる。11は杯身の破片である。復元口径12.3cm、同受部径14.9cmをはかる。口縁部は内傾し、端部は尖り気味。受部には沈線がみられ、その外面は回転ナデによって若干凹んでいる。器壁は分厚い。口縁部及び体部内外面は回転ナデ、底部外面は鋭い回転ヘラケズリ。ロクロ回転は時計回り。12は壺の口縁部である。復元口径7.3cmをはかる。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は水平な面をもつ。端部外面には一条の凹線がみられる。口縁部外面は回転ナデ。13は小型の提瓶で、口縁部を一部欠失する以外完存している。復元口径5.2cm、体部最大径10.8cm、器高13.7cmをはかる。口縁部は外反し、端部は面をもつ。体部は丸みを帯び、肩部に二ヶ所環状の把手を貼り付けている。なお、体部内面は計測不可能であるが、一部空気が入って膨れている。口縁部外面は回転ナデ、頸部や把手はナデ調整。体部外面は回転ヘラケズリ及び回転ナデを施している。器全体に自然釉や灰がかぶっているため、光沢がでている。胎土は精良で、焼成も堅緻である。14は土師器長頸壺の体部片と考えられる。復元体部径は15.8cmをはかる。調整は摩滅が著しく明確ではない。色調は浅黄橙色を呈している。

②その他の遺構と遺物 (fig. 5 , 10)

No. 0 +40m付近では、溝 1 が検出された。幅約3.7m、深さ1.2m以上をはかる。断面はU字形を呈している。埋土は上から青灰色粘土、灰色シルト、灰黒色シルト、黒色シルトであるが、地山は検出されていない。井戸や落ち込みの可能性もある。時期については明確でない。No. 1 付近では、溝 2 が検出されている。幅3m以上、深さ約0.4mの比較的浅い溝である。No. 1 +15m～No. 1 +35mにかけては大規模な落ち込み 1 が検出されている。幅約20.5m、深さ約0.55mをはかり、底面は平坦である。埋土は黒色粘質シルトのみで、底面の高さはT.P.+19.3mをはかる。池の可能性があろう。なお、No. 0 +45mからNo. 2 付近までの約50m間は、地山が落ち込んでおり、谷筋にあたるものと考えられる。また、No. 2 +25m付近では、溝 4 が検出されている。幅約1.8m、深さ約0.5mをはかり、断面U字形に整然と掘削されていた。溝の埋土は上層が茶褐色土、下層が暗灰色土である。溝の方向は条里の方向と一致している。奈良時代のものであろうか。No. 3 +20m付近では、溝 5 が検出されている。幅約7m、深さ0.7m以上をはかる大規模なものであり、埋土は砂礫層やシルトである。流路になる可能性が高い。地山は底面が深いため、確認できなかつた。埋土からは7世紀前葉頃の須恵器蓋 (fig. 10の15) が完形で出土している。

出土遺物 (fig. 10)

溝や土坑、ピットなどから種々の遺物が出土している。

15～27は須恵器である。15は溝 5 から出土した完形の須恵器杯蓋である。口径11cm、器高4.3cmをはかる。器全体は焼け歪みによってひしゃげており、口縁は水平ではない。口縁部内外面は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は仕上げナデ。ロクロ回転は時計回り。天井部にはヘラ切り痕が遺存している。器半部は灰がかぶっている。18はつまみをもつ杯蓋である。口縁部を欠失しているため口径はわからない。器中央にはやや扁平な宝珠つまみがつく。天井部外面は回転ヘラケズリ、つまみ周辺は回転ナデ調整。20はつまみを欠失しているが、蓋杯である。復元口径13cm、器高1.3cm以上。口縁部を下方に引っ張り出し、端部は三角形状に尖っている。口縁部内外面は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ。22は平瓶の破片と考えられる。復元頸部径5.2cmをはかる。調整は回転ナデ。23は高台付の杯身片である。復元高台径8.3cmをはかる。底部周辺は回転ナデ。25は広口壺の口縁片である。復元口径16.4cmをはかる。口縁部は外反し、端部外面に面をもつ。調整は回転ナデ。28は白磁碗の破片である。復元口径15.8cmをはかる。口縁部は外上方に真直ぐ伸び、端部は尖り氣味。口縁部外面は回転ナデによって若干凹んでいる。29, 30は瓦器片である。30は高台の破片である。高台は断面三角形を呈し、径は4.4cmをはかる。高台の外面はヨコナデ、底部内面には輪状の暗文が一部遺存している。31は平瓦片である。残存長9.5cm、厚さ2.1cmをはかる。凸面には繩目タタキ、凹面には布目痕が遺存している。32も平瓦片である。残存長8.3cm、厚さ1.9cmをはかる。凸面には繩目タタキ、凹面には布目痕が遺存している。33も平瓦片である。残存長9.4cm、厚さ1.7cmをはかる。凸面には繩目タタキ、凹面には布目痕が遺存している。三点の瓦とも焼成はあまり。

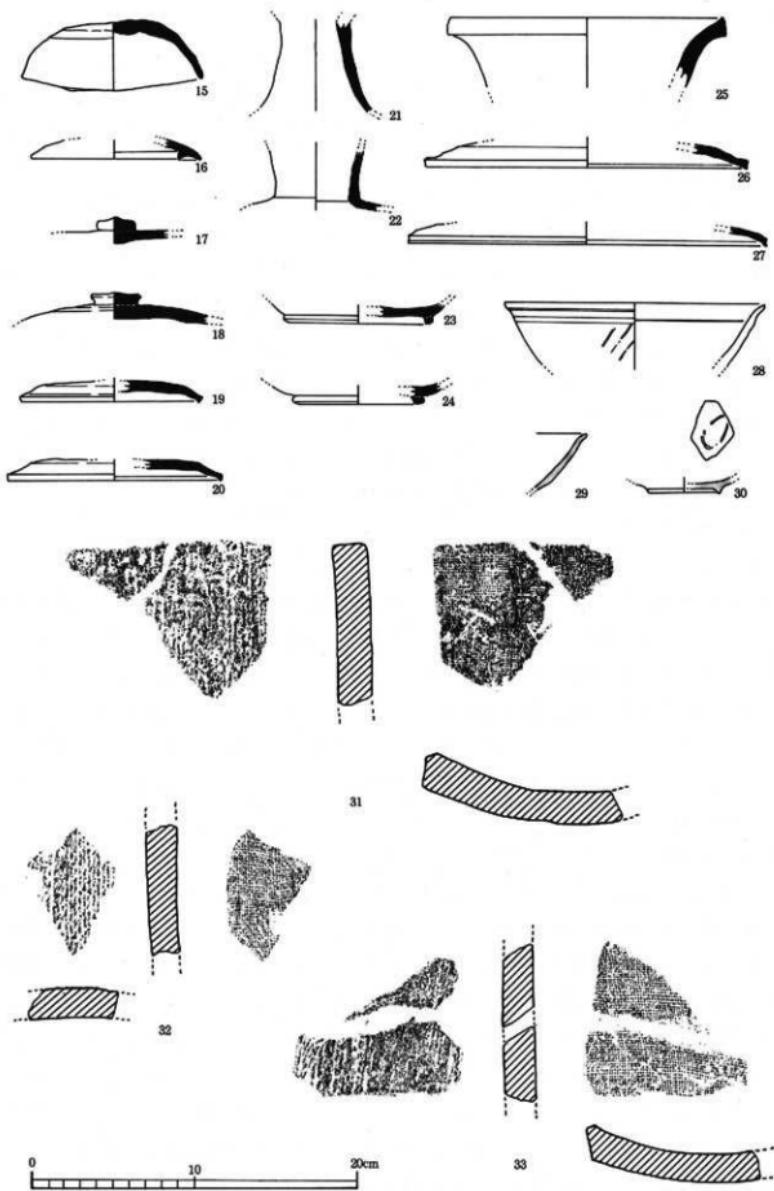


fig. 10 三軒屋遺跡出土土器 (S=1/3)

第4章まとめ (fig.11)

前章までにおいて、平成9年度の三軒屋遺跡の調査成果を概観してきたが、ここでは簡単にまとめておきたい。今年度の調査で検出された遺構には、長滝7号墳や、溝、土坑、落ち込み、ピットなどがある。中でも長滝7号墳は、農道内の幅約1.6mという調査区で幸運にも検出された。さて、長滝古墳群はT.P.+19m前後の低地に造営され、その範囲は府道大阪和泉・泉南線から北側の櫻井川東岸沿い東西約400m、南北約450mの範囲に分布している。その中で、7号墳は最も東端の古墳になる。ただ、各古墳は農道敷設やその周辺の住宅建設に伴う調査で検出されたものであり、現在古墳群内の大部分を占める畑や水田域には、おそらく数十基の古墳が埋没しているものと考えられる。これら各古墳は単独で立地しているのではなく、各々支群単位で密集して造営されたものと考えられる。古墳群は5世紀中葉から造墓が開始され、6世紀後葉まで連綿と営まれるようである。また、奈良時代墳と考えられる溝4は、現在の条里方向に一致するものであり、当地での条里施行時期についての貴重な資料といえる。さらに、数点出土している平瓦片は調査区の北東部に位置した禅興寺との関連を示唆するものである。今回の調査は試掘調査の連続のようなものであり、まさしく線的な調査であった。今後の周辺の調査に期待したい。ただ、これら小規模な調査の積み重ねが、古代～中世にかけての三軒屋遺跡の性格を徐々に明確にしていくであろうことはいうまでもない。

調査の実施及び本書の作成には、鈴木陽一、出合 明、阿南辰秀、伊藤慎司、北村美紀、大洞真白、加瀬洋子、川原清亮、森オリ江の諸氏からは協力と援助をうけた。記して感謝する。



fig. 11 長滝古墳群分布図 (S=1/5,000)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	さんげんやいせきはっくつちょうさがいよう・I							
書名	三軒屋遺跡発掘調査概要・I							
副書名	府営かんがい排水事業樋井川地区に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	上林史郎、地村邦夫							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 ☎06(941)0351							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ...	東経 ...	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
さんげんやいせき 三軒屋遺跡	いずみさのし 泉佐野市 ながたまちない 長瀬地内	27213	13	34° 22' 48"	135° 18' 57"	1997年11月1日 ～ 1998年3月31日	500m ²	府営かん がい排水 事業樋井 川地区に 伴う工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
三軒屋遺跡	集落跡 ・古墳	古墳・奈良 ～鎌倉	横穴式石室・溝・ 土坑・落ち込み		須恵器・土師器・ 瓦・瓦器・陶磁器	新たに横穴式石室を検出した。奈良～鎌倉時代にかけての大溝などを検出した。		

PLATE



三軒屋道路周辺斜め写真（上が北西）

P.L. 1
遺構①



No.4 付近全景
(南西から)



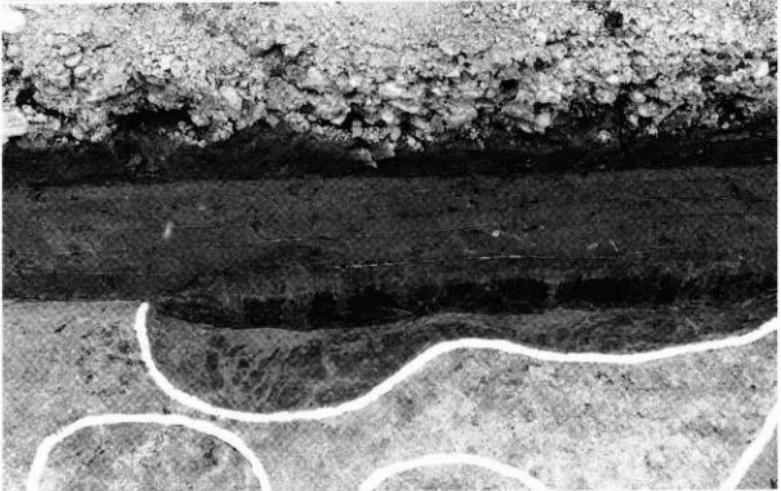
No.2 +20m付近
溝・ピット
(南西から)



No.3 付近
落ちこみ・溝
(南西から)



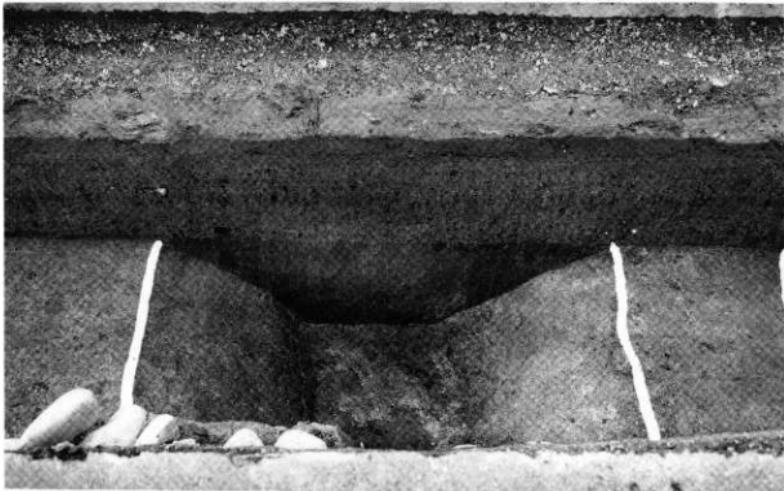
No. 5 + 15m付近
落ちこみ・ピット
(東から)



No. 5 + 10m付近
落ちこみ
(南から)



No. 5 + 25m付近
落ちこみ
(南西から)



No. 2 +25m付近
溝4 断面
(北から)



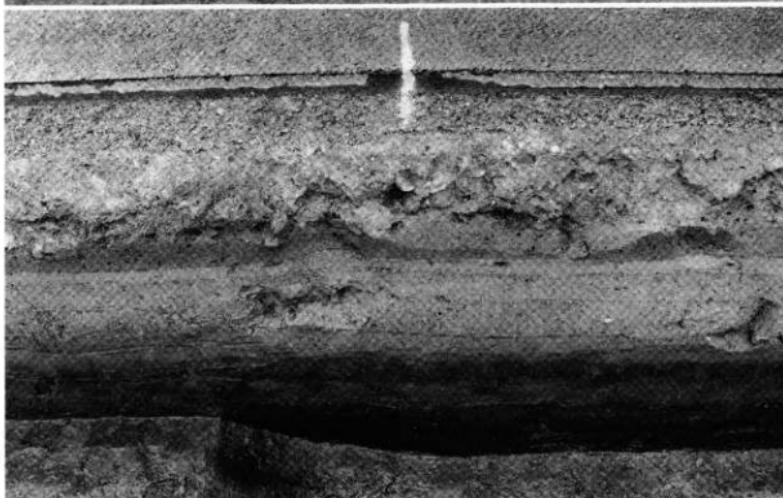
No. 2 +25m付近
溝4
(南西から)



No. 2 +30m付近
ビット群
(北から)



No. 1 +20m付近
落ちこみ 1断面
(東から)



No. 1 +10m付近
落ちこみ 1断面
(東から)



No. 0 +10m付近
落ちこみ 1南肩断面
(東から)



石室全景
(東から)



石室全景
(北から)



石室全景
(真上から)

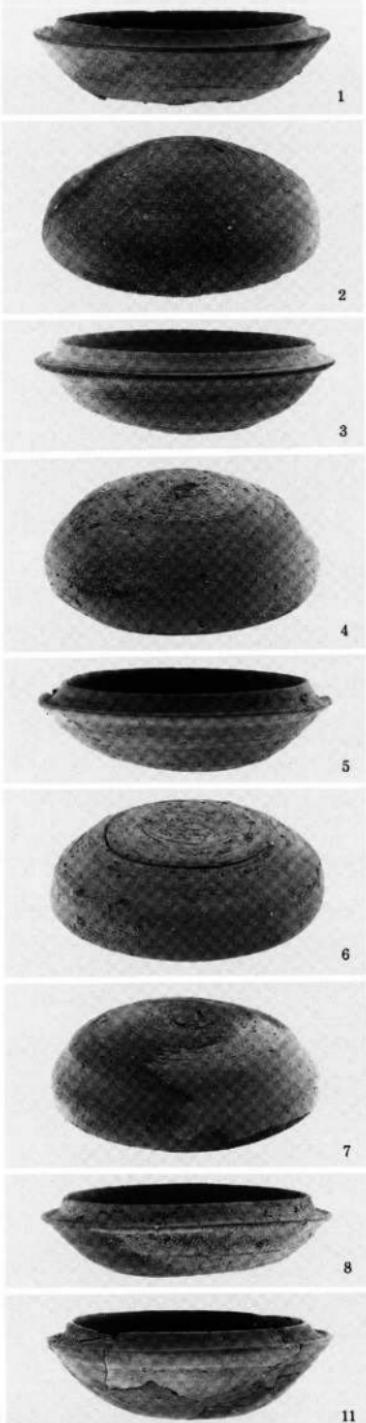




石室拡大
(東から)



石室拡大
(南から)



1~14は
長滝7号墳

